

## 環境政策・計画学科のこの1年

**高橋 卓也**

環境政策・計画学科長

4月には、瀧健太郎准教授が着任された。流域政策・計画をご専門とされており、自治体、研究機関、コンサルタント会社、NPOと様々な立場で河川と社会に積極的に関わってこられた。学生、教員、地域に新たな刺激を与えていただけるのが楽しみである。

教員の受賞も喜ばしいニュースであった。9月に村上一真准教授が、社会心理学を環境政策に適用したご研究によって「2017年度環境経済・政策学会奨励賞」を受賞された。本学科の学界、さらには政策コミュニティへの貢献として誇ることができるものである。

また、9月には香川雄一教授、林宰司准教授、平山奈央子助教が、湖南師範大学を訪問し、琵琶湖と洞庭湖の湖沼管理について、研究交流を行った。9月22日に東洞庭湖の現地視察、9月23日には「洞庭湖-琵琶湖の環境ガバナンスと法政策に関する国際シンポジウム」にて各先生の報告があり、現地の新聞記事・WEB記事で配信された。来年度以降も交流を継続する予定である。

本学科では、卒業研究に向けての問題意識の醸成を目指し、「学外現場演習」という実地調査の体験を1回生、2回生に課している。自分の興味のある「現場」に赴き、実態、課題について調査し、報告するというもので、1回生はイベント・会議等への参加、2回生は対象者2名以上への聞き取り調査をする。（ご協力いただいた多方面の方々に感謝いたします。）1月から2月にかけて、調査の報告会があった。その際のテーマを見てみる（高橋の主観的分類による）。1回生については、地球温暖化（9件）、自然保全・農林業（9）、廃棄物・循環型社会（6）、国際環境問題（5）、エネルギー問題（5）、環境の仕事（3）、まちづくり・観光（2）、教育（1）だった（計40件）。2回生については、まちづくり・過疎問題（12）、農林業・自然再生（7）、エネルギー問題（4）、廃棄物・循環型社会（3）、NPO・NGO（3）、観光（2）、国際環境問題（2）、公害・汚染（1）、災害、子育て、健康、CSR、年金、教育（各1件で計6）だった（計40件）。多岐にわたる分野が学生の関心事であることがわかる。卒業研究のテーマについても傾向を見てみると、エネルギー（5）、NPO・協働（5）、自然保全・農林業・獣害（5）、都市計画（5）、地域活性

化（4）、ライフスタイル（3）、廃棄物・循環型社会（2）、グリーン購入・フェアトレード（2）、企業の環境取組み（2）、防災・減災（2）、観光（2）、国際援助（1）であった（計38件）。総じて見ると、広い意味でのまちづくり、都市計画、農村計画の分野でのテーマが多い。1～3回生の準備段階での教育、進路指導について、これらの傾向を考慮する必要があるだろう。

今年度は、38名の学科学生が卒業した。本学科の卒業研究では、学科のモットー「答えを探すな。問題を探せ。」の通り、学生自身が問題を設定し、さらにオリジナル・データを収集することを必須としている。学生、教員ともに悪戦苦闘することもままあるが、人工知能・AIの時代に重要性を増す、問題の枠組みの設定、価値観の模索という人間ならではの能力を育てているのだと考えている。

最後になるが、小野奈々助教が和光大学に栄転されることとなった。環境社会学がご専門の小野先生は、テーマへの深い愛情を学生の心に訴えかけるご指導で学生に親しまれていた。ご研究では、環境、福祉の団体を対象として、定性的な情報を丁寧に取り扱う社会学らしい業績を挙げられている。様々な面で、他の教員に多くの示唆を与えていただいた。新たな職場でのご活躍を祈念申し上げます。

## 環境建築デザイン学科のこの一年

**陶器 浩一**

環境建築デザイン学科長

ここ数年定年退職等に伴う教員の異動が連続したが、今年度は変化のない一年であった。来年度あと一人教員を迎えればしばらくこの体制が続くことになる。教員メンバーもかなり入れ替わったこともあり、学科内に「カリキュラム検討委員会」を立ち上げ、カリキュラム見直し作業を始めたところである。

今年度の卒業研究は、23名が論文を、34名が制作を行った。最終の発表会では、6名のゲスト講評者をお招きし、熱のこもった議論が交わされた。地域に向き合い、人に向き合った、地に足着いたテーマ設定が多く見られたことも特筆すべきことである。

ゲストの一人である中園美博先生は2002年の本学卒業生である。ゲスト講評者は、学生たち自らが自分たちの研究成果を是非見て欲しい方を選んでお願いし、毎年、建築界で活躍する錚々たる顔